

# 歴史を生活感覚で楽しむ、雑想

2019.11.07 to

## 1. はじめに

歴史といえば一般には支配層の政治史をさすためか、一般人にとって歴史はつまらないものという捉え方が多く、日常生活においては歴史に直に触れることがあまりない。トーンを落として歴史的というならば、歴史ドラマ(NHK 大河ドラマ)や時代劇(銭形平次などのTVドラマ)は楽しみの対象となることもあるが、歴史については「昔のことを知って何になる」といった認識が当たり前という実状かと思う。(そうでない場合ももちろん多いが)

ここでは、歴史とは結構面白いはずなのに皆さん何故歴史に疎遠なのか、そんな観点から歴史を楽しむには歴史の本来に分け入ることから始めるとして、歴史と生活の枠組みによる歴史の楽しみ方に論及する。すなわち、上述の観点で「楽しむための歴史」を生活歴史の面から論議したい。具体的には、生活のなかでの歴史の捉え方について昨今の様相を主に郷土史と歴史ドラマを題材に展開することにした。ただし本稿は論文ではなく随筆である。

## 2. 歴史に接する

### 2.1 学びの対象としての歴史

歴史なるものとの出会いは何といっても学校教育にある。小学校から高校まで学ぶ社会科「歴史」である。学びの最初の頃はさしたる困難もないが、学年が下るに従い、歴史イコール年号となってからは歴史嫌いが急増する。「歴史はそうじゃないんですが」の声が震んでしまう。

### 2.2 観光として触れる歴史

観光旅行では決まって名所旧跡を訪れる。そこでは、年号なんて関係なく、歴史遺産や歴史偉人について見たり聞いたりといったことを皆さん割合面白がっている。京都のお寺さん巡りや何やらは、学校教育でいう歴史ではなく観光でいう歴史なのである。これをもって、皆さんには歴史を受け入れる土壌が根底にあるといえる。

### 2.3 郷土にて触れる歴史

観光でいう歴史の捉え方は実に健康的である。この延長線上として、郷土の歴史が好意的に受け入れられている。すなわち、郷土の歴史となると話は別で、自らの街の歴史としての捉え方が自然と湧き上がってくる。例えば、街にある樹齢何百年の巨木とか旧街道の道とかが歴史としての街のアイデンティティと

なり、またそんな事象を観光物語や歴史ドラマ仕立てにして過去へのタイムスリップで楽しむこともできる。

## 2.4 生活の中での歴史

観光や郷土と来るなら、当然ながら自分の世界にも日常的な歴史を宿しているはずである。すなわち、日常生活の場として「自宅」が歴史を背負っているといえる。小さい時の思い出や成長にあわせて家の中の設えや空間に年季が入り込んでくる。これが、我が家の歴史である。ここにご近所さんや親族が居れば、近所さん歴史や一門歴史が一帯に宿ることになり、ときには自分のルーツとしての歴史が花開いてくる。

要は、生活の営みを刻めば、これが歴史となり、生活の充実は「歴史を楽しむこと」といえる。

## 2.5 ドラマ仕立ての歴史

住まいに居ながらにして歴史を楽しむことができるようになったのは(映画もあるが)TV時代に入ってからである。TVでは昔の時代における人間ドラマとしてつくられる歴史ドラマでは、(歴史ファンに限らず)一般の方々でも楽しんで鑑賞できる。さらにいえば、捕り物帳などサスペンスものもまた娯楽の歴史ドラマとして楽しめる。

これをもって何となく無意識であっても歴史に触れていることになる。しかも、歴史ドラマがさりげなく見ていることで人を楽しませるならば、歴史を楽しんだといってもいいであろう。なお歴史ドラマについては後章にて。

## 3. 歴史の意味

我ら歴史といったときに歴史をどう捉えているのであろうか。学校教育の歴史はさておき、街の歴史、ドラマ世界の歴史といった観点から歴史観をおさえよう。

### 3.1 歴史の本質

歴史ファンにとっては「昔のことを知って何するのか」といわれることが多い。そんな時、「温故知新や過去との対話です」と気取っていふこともある、「とにかく面白いでしょう」ということもある。最近は、街づくりのアイデンティティは歴史からという位置づけもある、と。このように歴史の位置づけは多種多様であるが、やはり歴史が過去から現在と未来をつないでいることを強調して「現在は過去の結果、未来は現在の延長」という捉え方が一番わかりやすく理解されやすいと考える。なお、そこにおける現在とは今ある環境や人間の存在と関係性をすべて込みにしたものとしている。

### 3.2 我らにとっての歴史とは

一般に歴史について、政治の視点から「支配層の歴史」イコール「世の中の歴史」といわれるとおり、為政者による支配のもとでの民衆が営む生活であれば、当然歴史は支配層中心の歴史となってしまう。しかしながら、例えば食や住まいなどの歴史的起源や変遷といったことなれば、民衆はこれを歴史と捉えて、生活環境の身近な点から歴史を大いに支えていることになる。

### 3.3 なぜ歴史が大事なのか

歴史が大事とよく言われているが、何がどう大事なのかと聞かれるとハタと困ることが多い。「〇〇年に何がどうなって、だからこうだって」というような説明はかえって難しい。その点、「街のアイデンティティや個性は歴史である」と言ってのけるのは割合容易であり、街の変化も歴史という捉え方が我らにとつて一番しっくりする。例えば、身近な自分の街で小学校が新しくなったとか、ショッピングセンターができたとかいった事が自分たちの街の歴史になっている。

### 3.4 歴史の活用

歴史をなぜ学ぶのか。それは現代に役立てるためである。これには、「温故知新」や「過去の結果が現代」などの考えがある。以下、二点見よう。

第一の考えはビジネス書にみられる。ビジネスでは、人材活用、攻めの戦略、人心掌握などを戦国武将から学べとかいった本が多く出ている。これらは戦国武将の思考が現代に展開できることを前提に、戦国期に学べということである。確かに読んでいると面白いし、ビジネスにも(直接でなくても)ヒントとなろう。

第二の考えは、諸問題の解決に向けて己を知り相手を知ることから始め、現在の分析を過去からの時空間で検討するものである。例えば、紛争解決に向けては、現代の時点から大きく遡って歴史や風土の変遷をにらみながら、進むべき方向を探査することや相互尊重を図る手立てを練り上げることが試みられよう。

## 4. 歴史ドラマ

ここで、歴史ドラマがさりげなく視聴者を楽しませる理由、すなわち歴史の持つ魅力について考えてみる。

### 4.1 歴史ドラマにおける歴史

歴史ドラマとは、昔の人が時代をどう生きたのかを偉人や一般庶民を介した生活ドラマそのものである。しかも、極論すると、そのドラマは過去に時代設定したことにより、時代の奥みが見る人を時として歴史旅行者に仕立て上げ、人物と生活さらに風景などの環境が盛り込まれている時代空間を楽しめるようになっている。

これとの対比の現代劇では、設定が現代であるだけにドラマは時として辛辣にもなりうる。これを避けたいために、時代を未来か過去に設置することもある。

その意味では現代にない環境という新たな設定環境を過去に求めたのが、歴史ドラマともいえる。そう考えると、ドラマの中で人物や環境を通して時代の様相が歴史世界そのものであるので、これはもう歴史を体感しているといつてもよいであろう。

## 4.2 歴史ドラマは歴史そのものではない

歴史ドラマをすぐ歴史と思っても不思議でない。NHKの歴史ドラマでは時代考証はあっても、そそかしい人ならドラマのせりふがそのままの事実と勘違いもする。

ではドラマ制作側の意図はどうか。何故歴史ドラマ(をつくるのか)か。設定した過去の時代を今日と違わせることで、作る側を歴史観察者や歴史創造者の気分にさせて、ドラマに制作意図を盛り込ませ、面白さと身近さを求めてフィクションが満載となるといつてもいい過ぎではない。視聴者が面白がるのは、そのフィクションなのである。そんなドラマであってももちろん時代考証は風俗や環境そして史実との整合性が図られている。

## 5. 生活感の歴史

### 5.1 歴史に接して我ら生活を振り返る

歴史ドラマの鑑賞として、意識しようがしまいが当時の生活に自分らの生活をダブらせている。例えば、江戸時代、お蕎麦屋さんで蕎麦をすれば何文か(何円か)といったように、視聴者が設定時代の生活環境に浸っている。そこでは生活環境の昨今について、多少なりとも考えれば歴史がより一層身近に感じられる。

またそれが、自分の周辺についても歴史を感じさせてくれ、時には自分史を作ってくれることもある。そんな自分史が過去現在で多数集積するなら、それは郷土全体のいわば郷土史ともなろう。歴史とは、多分に自分たちの匂いのする個々の歴史そのものなのであるといえよう。

### 5.2 歴史に接して昔の生活を想像

TV歴史ドラマ鑑賞では、例えば江戸期、何万両は今のいくらなのか、加賀100万石はどのくらいの大会社なのか、など思うことがあり、そんな思いをもって感情移入ならぬ時間移入が図られているのであろう。

磯田道史氏の「武士の家計簿」という本ではないが、金銭感覚により当時の生活が垣間見られる。そんな金銭感覚を念頭において人の生活をつぶさに見るとなると、大人や子どもがどんな生活をしていたのかなあ。コメの食卓で家族団らんか。お給金は、など、想像は膨らむ。

## 6. 郷土史、地元富山の歴史

富山県に住む我ら(私)は、富山県の歴史を日本歴史とは違って何となく身近に感じて、何となく知ってみたいという気持ちになる。郷土史とはそのようなものであり、大なり小なり、いろいろな視点や方向で関わるのが一番の魅力であろう。しかも、何かこだわりをもってピンポイントで迫っても、何かしらの新しさを感じる。そんな観点で、私は自分の好きなポイント歴史として過去の偉人と地域アイデンティティとにより富山の歴史に對面している。

## 6.1 郷土史への関心

### (1)郷土は過去の偉人から

富山の歴史はといわれると、すかさず真っ先に戦国乱世の佐々成政や近世加賀藩時代の前田の殿様が思い浮かぶことから、歴史への関心や興味は歴史上の人物を介して深まるといえる。

### (2)郷土史を束ねて広域の歴史へ

郷土とは自分の周りの地域や富山全域を指すが、あくまでも基本は自分の周りであり、富山全域は各自の郷土の集積と考えたい。そうすれば、各自身近な郷土史を束ねかつ束ねによる新産物をも含めて富山の郷土史が構成され、ひいては日本の歴史へとつながっていく。また、歴史を地域アイデンティティとリンクさせても同じことであり、身の回りから広域へと歴史の関心が広がっていくといえよう。もちろん、日本歴史から富山や各地域の歴史へと降りる捉え方もある。

## 6.2 個人周辺から郷土へ、自分中心史から郷土史へ

一般には、街中での変化が身近な歴史とすることが多い。郷土史は、多分にそんな自分たちの匂いのする歴史なのであるといえる。

ではその匂いの源に何があるのであろうか。それは行動圏・生活圏における生活の営みであることはいうまでもない。身の回りの皆さんのが想いが積み重なって、総体として地域圏あるいは大きなコミュニティが時間という奥みをもって形成されていく。その全貌が結果としての郷土の歴史を育み刻んでいくといえよう。

## 6.3 自分流の郷土史の勉強

歴史を勉強していくと何となく歴史に精通したくなるが、富山の歴史というオーソドックスな体系には近寄りがたいとはいえ、それでも近寄りたいとの願望もある。そこで考えたのが、「歴史は誰の何のための歴史か」という視点でもって歴史を自分流に語ることである。これは、世の中では当たり前であっても、自分にとってはありがたい文言である。これによって、よくいわれている「歴史を何のために知るのか、郷土のアイデンティティとは」が自然と板についてくるようになり、自分流の歴史には一味も二味も違った味付けが可能となっている。

そんな観点によって、歴史は種々の対象と視点で語ることができ、「誰でもが

語れる」ことが歴史のだいご味と思うようになってきた。

## 7. おわりに

「歴史がもっと生活の身近にあれば」との思いをもって庶民風歴史論について歴史ドラマや郷土史を含め展望してみたところ、(一般の方々や自分にとっても)歴史への認識を新たに積み上げることができた。以下に列挙する。

- ・生活実態に着目すれば、生活の歴史的実像化が可能となり、ひいては歴史は日常的認識そのものとして生活によりうことになる。
- ・歴史登場人物に着目して歴史の縦横断的な流れを把握するなら、時代を読むことさえ可能となり、歴史の楽しさが増す。
- ・歴史ドラマの鑑賞については、歴史への触れ合いとしてタイムスリップが過去と今を融合させ、時代展望が歴史の面白さにつながる。さらにそこにおいて、例えば江戸期の1両は今の(5~)10万円といった当時の生活水準を目の当たりにすると、社会の昨今同時体験が歴史の面白さにつながる。
- ・以上をもって歴史のだいご味を感じ、歴史がますます身近になるといえる。

## 付録1. 歴史の楽しみ方: 現代での歴史体験、滑川宿にて

歴史の楽しみ方として、当時の街道を歩くのも一興かと存じます。実は今年の夏、加賀市(大聖寺)の方々が江戸を7月29日に出立し大聖寺8月11日到着という13泊14日のロングウォークを貫徹されました。総距離540km、数十人の一  
行で宿場間をリレーして、各宿場での応援の方々を含めて総参加者数は1000人程のこと。一行は、殿様気分で参勤交代の街道(中山道・北國街道・北陸街道)を40km/日のペースで歩かれました。滑川の数人が8月7日に滑川宿本陣付近数km程をご一緒させていただきました。こんな楽しみ方も実際にいいものです。写真は本陣近くの歩きと本陣での休息を撮影。



## 付録2. 歴史の楽しみ方: 現代での歴史体験、大山にて

「おおやま佐々成政戦国時代祭り」にて大いに歴史ドラマを楽しむ。

現代における歴史体験(歴史の楽しみ方)として、歴史人物を鑑賞するのも一興かと思う。どこの地域でも、神社仏閣や石仏など静の歴史とは別に、動の歴史としてドラマ仕立ての人物歴史をお祭りとして観劇できる。

大山では、厳冬期の北アルプス越え(ザラ峠)や佐々堤などで有名な佐々成政が人気である。恒例の標記祭りの武者行列では、勇壮な武士や艶やかな姫君が登場し、多くの方々が戦国期の時代絵巻を目の当たりにして見入っている。

いわば、歴史と親し  
んでいる。

歴史の楽しみ方として、ドラマいや絵巻の鑑賞は実にいいものであり、そこにはロマンあり、人間模様あり、文化あり、だからである。

**謝辞**：大山写真は元大山教育行政センター長の東田さんから提供。謝意を表する。

